

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



伯仙分教会

大正14年3月23日	石洲宣教所設立
昭和10年12月3日	移転復興(改称)
昭和35年9月15日	神殿建築及附属建物増築
昭和36年5月8日	鎮座祭
昭和36年5月9日	奉告祭

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。



立教187年
3月号

おたすけ推進の集い開催

1・20 年頭会議後

大教会(年祭準備委員会)は1月20

日、年頭会議に引き続き「おたすけ

推進の集い」を開催。このおたすけ

推進の集いは、御本部からのお打ち

出しに沿い、教会長、その配偶者、

布教所長が、日々のにをいがけ・お

たすけの更なる充実を目指し、道に

繋がる用木・信者の先頭に立ち、陽

気ぐらしへのたすけ一条の道を歩ま

せて頂ける様、開催して下さいまし

た。

▼プログラム・感話の内容は以下の

通りです。

▼プログラム

①内統領先生のメッセージビデオ視聴

②日々おたすけに励まれる方々の感話

「日々のにをいがけ」

明石市分教会 会長夫人

杉原 恵子 さん

「積極的なおたすけ」

福富士分教会 会長

藤井 正仁 さん

「ちばの理を戴く」

大恵山分教会 会長

瀬藤 友昭 さん

③本部作成のビデオ視聴

④少人数での練り合い

▼日々のにをいがけ

明石市分教会 会長夫人

杉原 恵子 さん

教会の年祭活動目標は、①「今日も

陽気に、いそいそと。」と②「地域の

なくてはならない教会を目指そう。」

の2つ。

②の地域活動を始めたきっかけは、

年祭活動前、コロナ禍で地域の子育て

広場が閉鎖している頃、教会に遊びに

来た事があるママ友から「杉原さんの

ところで子育て広場をしてほしい。」

と言われたこと。そこで感染対策をし

て、「全国おもちゃの図書館連絡会」

に加入して、おもちゃ図書館を始めた。

その後受講した「教会長夫妻特別

講習会」で聞いた「地域の人に教会に

来て頂けるように、教会の敷居を下げ

よう」というお話に、明石市分教会だ

からこそ出来ることも食堂をやる事に

決めた。教会は通学路に面し、毎日250

人の子どもが通ることや、朝食を摂ら

ない子や行き渋りの子の増加を聞き



「日々のにをいがけ」 杉原恵子さん

て、元気に一日を過ごして欲しいと週

1回の朝食を。そして金曜夕方のこと

も食堂がママには助かる、と聞いて月

1回の夕食弁当を始めた。

また幼稚園のPTA会長になり、「う

わ、忙しいやろな、最悪。」と思っ

たが、活動を紹介する機会が増え、地域

の広報紙で紹介されたり、小学生が町

の社会見学で来たり、と地域の方から

教会に来て下さるようになって、1年

でおもちゃ図書館は217人が利用、こ

ども食堂は約900食の提供が出来た。ある

先生から言われた「にをいがけて教

会に一人お連れすることは大変な事

や。地域の事やってたら、むこうから

教会に来てくれはる。」の言葉通りに

なり、どんな事でも一生懸命にさせてもらおう、と感じている。

こども食堂に来てくれる1人のママ

は毎回たくさんの子を誘ってくれる。

話を聞くと小さいころに教会に泊まっ

たことがあるので、教会に悪い印象が

ない、という。前会長夫妻が昔こども

会の世話をしていた種がこの形で返っ

てきたのだと感謝している。

食堂を利用の中には事情を抱えた方

もいて対応に困り果ててしまうことも

ある。でもこの方も、教祖にとっては

かわいい我が子、私達夫婦へのかしも

のかりもの、と日々のおつとめでたす

かりを願っている。

この1年を振り返ってみると、その

時々教祖が必要な人と会わせて下

さったおかげで順調に開催でき、感謝

の気持ちと、この活動に間違いはな

かったと感じている。今後も地域の

ニーズは何か、教会として出来ること

はないか、とアンテナを張って活動を

続けたい。

▼積極的なおたすけ

福富士分教会 会長

藤井 正仁 さん

年祭活動直前の12月、息子の彼女が

本部月次祭に参拝してくれ、とてもありがたく思った。福山分教会の餅つきにも参加してくれ、熱心な信仰をしてくれるのでは、と期待していると、その娘をきっかけに家族がコロナにかかり、16日まで休んで過ごす事となった。その間、いろんな夢を見た。夢占いの「運気が上がっている」との診断結果に首をかしげている頃、おたすけ先の出直しが相次いだ。「藤井さん、よろしくお願いします。」の遺書もあった。そうかと思えば、統合失調症の人が修養科を志願するなど、次から次へと事情が起こった。

布教寮生の息子から「ホームレスの人を預かってほしい」と頼まれ、引き受けた。話を聞くと、小さい頃から暴力で育てられ、早くに両親を亡くし、親戚をたらい回しにされ、暴力団に身を置くことになったとのこと。世話をするうちにいなくなつた。

次におたすけさせていただいた人は、教会でお世話になったことがある人らしく、月次祭の手伝いもよくしてくれ、よく働く人だった。生活保護・通帳・年金と手続きの世話をしたが、入金の日には姿を消され、借金を背負うことになった。



「積極的なおたすけ」 藤井正仁さん

人間は安心があるから生きていく。安心の元は信頼関係と思うが、この2人はそこが欠落しているように思う。

20年程前のある男の子のおたすけは思い出に残った。

彼の父は早くに出直し、母は父の弟と再婚した。思春期にその事実を知った彼は、義父の愛情が自分と兄弟で違ふと感じ、非行に走りシンナーを吸つた。成人して働くが、そのうち行かなくなり引き込みりに。酒に溺れ家が荒れてきた頃、義父が彼に手をあげるようになった。

それから10年程は家で住めなくなつたが、その間にある時母の目付きが変

わつた。あとから知つたが毎月10万円を彼のためにお供えしていたという。どれくらい続けたか定かではないが、そのうち義父が彼を引き受けてくれ家に戻つたものの、働かないし酒は飲む。そこに彼を支え続けた母が脳梗塞になつてしまふ。困つたことになつたが、

義父は母の世話から家事全般をそして彼の世話をするようになった。彼は安定して働くようになり、母を献身的に世話し、自分を大事にしてくれる義父の姿に、義父の事を「親父」から「父ちゃん」と呼ぶようになり、「父ちゃんすごい！」と言うようになった。影で母が尽くした事が理を吹いた。家族団欒のご守護だった。

私の仕事は何でも屋みたいなもの。自分の出来る親切で繋がり、信頼をつくつて、次の人間関係を構築していく、この私のスタイルを続けていきたい。

▼**ぢばの理を戴く**

大恵山分教会 会長

瀬 藤 友 昭 さん

教会の年祭活動目標を決める参考にしたのは2つ。

①表統領先生のお話、「15年後の教祖150年祭、ここに目標を据えて、その

目指す姿をそれぞれで定めて、実現できるように歩んでいこう。(中略)15年後になっていたい姿を考えていただいて、実現できるように、15年間をしっかりと歩ませていただくことが大事だと思います。」(みちのともR184・5月号掲載)

このお話が10年程前、校長になつての不安をたすけてくれた恩師の話、「学校でも企業でも一隻の船のようなもの。船長は次の港を目指して舵を取り、次の船長にバトンを渡す。船員の協力は不可欠。大切な事は航海の最終目的地はどこか、船員全員で共有すること。」につながつた。

②諭達ご発布の秋季大祭、当日8時に孫が生まれた。印象に残つたのは「その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」

①・②の事から私達の目的、陽気ぐらし世界の実現に向かつて教会が目指す姿を、年祭の活動目標と1年目の実践項目に定めた。

目標は、「大恵山分教会設立100周年記念祭(立教199年)を目指して、理づくり・土台三年千日を歩む」



「ぢばの理を戴く」 瀬藤友昭さん

学生層育成者講習会
開催
学生担当
委員会

2月21日、学生担当委員会(上原繁次委員長)は、「学生層育成者講習会」を開催し、本部学生担当委員会より、西川寿一委員の出席があった。西川委員は、自身のエピソードを交えて、学生層の特性、育成の有りがたさ、会活動の進め方などについて講話を行った。参加者は、ひなごたを求める講師のお話に、熱心に聞き入っていた。

また、午後からは、笠岡の学担委

- ・100周年記念祭までに用木20人以上
- ・年祭活動期間に5人以上

1年目の実践項目は、「①年間100人以上のおぢばがえり、②顔を見て名前を呼んで挨拶する、お礼を伝える」。会長を拝命してから多くの信者さんが出直したが、100周年を賑やかにしたい。そして用木信者みなで力を合わせて出来る事、一人でも多くの人を、という思いで別席者を連れて「100人以上のおぢばがえり」と定めた。1年やってみてうれしかった事は、

員を対象に、『グループタイムのポイント』と題して、懇談会が実施され、活発な意見交換が行われた。

(講話内容は次の通り)

若者の育成というのは、青年会や婦人会、学担や少年会といった決まった人だけが携わり、行事に参加すればよいといった単純な事ではありません。色々な場面で、様々な人が言葉や心かける事によって、お道の人の温かさや、信仰のありがたさがじわじわと、若者に伝わります。若者の育成は、同じ人が何度も同じ事を言うよりも、色々な人の言葉や考え方が必要で、家

「100人以上のおぢばがえり」を達成できた。信者さんが我が事として動いて下さり、高屋の別席ひのきしん団参にマイクロバスを貸し切り21人で参加。こどもおぢばがえりには、息子夫婦が作ったチラシを配り、未信家庭から申し込みがあった。願書ほか手続きをしたものの、6年程経過していた人が、団参とこどもおぢばがえりで初席を運べた。

最もありがたいのは、若い用木A君。突然会社を辞め、1年以上引きこもっ

族や教会はもちろん、お道全体で取り組んでいかなければいけない事です。若者と言われる、高校生や大学生の頃は、多感な時期で、自我が芽生え、自分のしたい事もだんだんと出てきます。理屈をこねて物事を斜めから見たり、反抗的に見たりする面もあるかと思えば、逆にとっても素直な面も持ち合わせていて、この時期の出会いや出来事が、後々の人生に大きな影響を与えらるという事もたくさんあります。そんな若者は、周りから、「もう子供じゃないんだからちゃんとしなさい」と言われる反面、「まだ子供なんだからそんな事はしなくてよい」と言われたり



てしまった。信仰熱心だった祖父の出直しをきっかけに修養科を志願して、元氣を取り戻し、「今の自分があるのは祖父の信仰のおかげです。」と言ってくれた事。改めておぢばの理はありがたいと実感した。

もします。心と体も子供から大人に成長するほどまで揺れ動いており、不安定で色々な事に悩んだりする危なっかしい時期でもあります。しかし、そんな若者が持っている大きな徳分があります。それは字のごとく、「若さ」です。若いという事は多くの可能性と希望があり、未来に向かって無限の可能性が広がっています。そんな素晴らしい徳分ですが、それと同時に、年齢や学年を重ねるにつれて、自分の進路や道を決めなければならず、それは、自分の持っている無限の可能性を削っていくという作業になります。この自分の可能性を削るという作業は、心に



育成について体験談を交えた講話

とって大きな負担になります。この時期に自分の進路や人生を選択します。その選択の時に、おつとめやひのきしんという信仰的な時間、教会やお道の行事という信仰的な空間、そして、青年会や女子青年、学生会の仲間といった信仰的な繋がりが、必要なものとして残るのか、不要なものとして削られてしまうのか。この時期は、信仰が伝わるかどうかの、人生の大きな分かれ道だと思えます。この時までには、若者たちの心の中に、身近な大人の魅力的な信仰者としての姿や、信仰する意味や喜びがなければ、どんどんと信仰から離れていくように思います。学生の

時期というのは、私たち大人の努力や工夫次第で、時間や労力を割いてもらえる最後のチャンスと言っても過言ではないと思います。しかし、その学生や若者の育成を、教会や、教会長の丹精、それぞれの家庭でするとなると、簡単な事ではないと思います。そんな中で、学生会という活動は、同じ立場や年代である学生が、互いに楽しく信仰と向き合って、お道の教えを自然と好きになれる素晴らしい場所です。私が一緒に学生会をしていた仲間の中にも、学生会で自分の居場所を見つけてくることができたり、引きこもりがちだった子が、学生会で自分の良い所に気付いて外に出れるようになったりと、学校やバイトの友達とは違う、家族にも言えない事を正直に言い合えるお道の仲間と、どんな事でも受け入れてくれる学生会の雰囲気、心を救われ、大きく人生を変えてもらったという人がたくさんいます。

▼学生会に出会う前

私が会長を勤める賑町分教会は、堺市の中心部から少し離れた住宅街にあって、三軒長屋の一角のとても小さな教会です。今年で教会設立77年に

りますが、教会の建物自体は築100年以上経っており、雨漏りがしたり、壁に隙間があったりと、建物のあちらこちらが傷んでおります。神殿は2階にあって、元々は4畳半と6畳の2部屋だったのを、無理矢理一つの部屋にして、6畳の部屋の半分の3畳を上段にして、残りの3畳と横の4畳半が参拝場という感じでした。12年前に結婚をきっかけに自教会に帰りましたが、その頃は月次祭に来てくれる信者さんは、片手で数えるぐらいしかいませんでした。次に、私の両親はどんな人かと言うと、母はとても信仰熱心で、性格はまさに「大阪のおばちゃん」といった人物です。私が小学校高学年ぐらいの時に、あまりにもお腹がすいたので、「お母さんお腹すいたわあ」と言うとも母は「お腹がすいても食べるもんないんやからしゃあないやろ。我慢しなさい。それでも我慢できへんのやつたら公園に生えてる草でも食べてきい」と言う感じの気合の入った母です。

父は、教会長でしたが、私が中学生になった頃から、アルコール依存症が進み、毎日のように家族とトラブルを起こしていました。また、その事をきっかけに、姉が精神的に不安定になり、

一方的に私との関係も悪化させ、家族関係は、ボロボロの状態でした。私は、幼い頃より母から教会を継ぐようにと言われ続けていたので、このようなひどい状態がずっと続くのかと、何の希望も持てない日々を過ごしていました。

私は中学校卒業後、当時の親里高校に入学し、寮生活をする事になりました。おちばの友達は、皆、信仰家庭の子ばかりでしたので、天理教に対するコンプレックスを感じる事も無く、家にいる時よりもリラックスした生活を送る事ができました。そんな同級生とたわいもない話をしていると、自分と同じように両親と仲が良くない友達もいました。中には、「それでも親が死んだら悲しいもんやで」となだめてくれる友達もおり、自分も父親の事を嫌っているけれども、それは思春期の若者にとっては何も特別な事ではなく、自分もみんなと同じように、さすがに親が死んだら悲しいと思うんだろうなと安心したりもしました。おちばでの生活を、それなりに楽しく過ごしていた高校2年生の夏休みに、研修で1か月間アメリカに行く事になりました。その期間中に、日本から電話があ

り、母の口から父が出直したという事を告げられました。その時の私の心境は、急な事で驚きはあつたけれども、悲しい気持ちはありませんでした。自分は何て冷たい人間なんだと、つい自分自身にも絶望し、心底自分の事が嫌いになりました。

▼学生会との出会い

大学進学を前にした春休み教会に帰ると、先輩や支部の学生会の人が、春の学生おちばがえりに向けて、直接会いに來たり、何度も電話で声をかけてくれました。しかし、私は、自動車教習に通うという理由をつけて、全てのお誘いを断っていました。教習は順調に進み、仮免許の試験の日を迎えました。しかし、坂道発進で上り坂で車を停める時に、上げたはずのサイドブレーキがなぜか効いておらず、少し後ろに下がってしまい、不合格となりました。その後の再試験は、1週間後という事でした。何と突然できた次の試験までの空白の1週間の中に、ちょうど春学の期間が入っていたのです。そして、そんなタイミングで、支部の学生会の女の子から、春学のお誘いの電話があり、私は春学に参加すること

になりました。

その後、学生会の行事に何回か参加するうちに、学生会という場は、そんな軽い場ではないと思うようになりました。自分と同じ大学生や、自分よりも年下の高校生が、とても楽しそうに信仰していました。やらされるのではなく自分から教えを求め、荒削りながらも必死に教えを実行したり、勉強したりと、人のために一生懸命になっている姿が本当にキラキラしていて、何の希望も持っていない私には、とてもまぶしく映りました。そして、いつの間にか、自然と仲間と笑い合ったり、誰かに喜んでもらうために努力したり、身上の友達の助かりを願ったり、真剣に一人でおつとめをしている自分がいました。自分の乾いた心が少しずつ潤っていくのを自分でも感じました。私は、学生会のおかげで、自分が進まなければいけないこの道は、真つ暗でも見えないのではなく、目がくらむほどに明るく輝いていて、素晴らしい道なんだと気づかせてもらいました。それからは一転して、もつと色んな人にこの素晴らしい教えを知ってもらいたい。そのために自分がもつとこの教えを知り、深く心に治めたい。

そして、こんな自分でいいのなら、教会を継がせてもらって、一生かけて自分の心を教祖の御心に近づかせてもらいたいと思うようになりました。この20歳の時が、人を助ける心になりたい、と自ら進んでこの教えを信仰しようと思った、本当の意味での信仰の元一です。その背景には親々の伏せ込みはもちろんですが、紛れもなく学生会の仲間や学担の先生に親心をかけて下さったおかげだと思っています。

▼育成のありがたさ

「最近の若者は何を考えているか良くわからない」という声を耳にしたり、自分も言ったり思ったりしていないでしょう。私もよく思います。今の若い子達は、物心付いた頃からパソコンやインターネットがあり、スマホを使うのが当たり前で、社会の変化もほとんどん早くなっているのも確かです。しかし、それは今の時代に限った事ではありません。なぜなら、今から2千年以上前の、プラトンというギリシャの哲学者が次のように言っています。「最近の若者は、目上の者を尊敬せず、親に反抗、法律は無視、妄想にふけて道徳心のかけらもない、このままでは

どうなるんだ」と、当時の若者の事をなげいています。そして、日本でも千年前の平安時代に書かれた「枕草子」で清少納言も次のように記しています。「最近の若者は、非常に言葉が乱れており嘆かわしい。何から何まで省略したような言葉を使つて、とてもみつともない」。

若い子の考え方や言葉が、理解できないというこの感覚は、何千年も前から繰り返しています。では、私たちは何を頼りに若者に向き合えばよいのでしょうか。それは、教祖のひながたという道しるべ、生き方のお手本です。教祖は若者の育成に対して何と教えて下さっているか。まず、逸話篇196「子供の成人」を挙げます。

「分かん子供が分かんやない。親の教が届かんのや。親の教が、隅々まで届いたなら、子供の成人が分かるであろ。」

と、繰り返し繰り返して、聞かして下された。お蔭によって、分かん人も分かん、救かん人も救かん、難儀する人も難儀せぬよう道をおつけ下されたのである。

「最近の若い者は」と、分かんない

(篇196)

子どもが悪いと思うのではなく、伝えようとするこちらの思いを、届かせる事ができていないと仰っています。これは、本当にありがたい言葉だと思います。塾や習い事なら、その関係は、お金を払ってでも勉強やスポーツ、また、何かの技術を身に付けたいと思っ

ている生徒と先生という関係です。しかし、お道の育成の現場はちよつと違

うと思います。なぜなら、育成される側の学生や若者は、育成されたいと思っ

てない場合がほとんどだと思います。つまり、そこに存在するのは、信仰の素晴らしさを伝えたい、親神様の

親心を伝えたいという心を持った、育成する側しか存在しないという事です。そう思っ

て先ほどの逸話篇を見ると、分からない子どもが分からないという事を、そこに目を向けるのではなく、教

えを伝えたいという思いを持ったこちら側が、ひたすらその教えを届ける努力をする事が大切だと教えて下さっています。だから、

相手を責める必要もなく、結果を焦る必要もなく、伝わらない事に不足する必要もありません。ただただ、届ける

本当にありがたい、親心いっぱいだと思います。

次に、おさしづにも若者の育成についてのお言葉があります。郡山初代会

長・平野檜蔵先生の奥様、平野トラさんの身上に対するおさしづです。

若い者寄り来る処厄介、世界から見れば厄介。なれど道から厄介ではない。道から十分大切。：：年の行かん者我子より大切、そうし

たなら、世界からどういふ大きな事に成るやら知らん。すれば、そ

んなら何が間違うてある。日々という、言葉一つという、これ聞き分けてくれるよう。(明26・6・19)

親神様も若い者は厄介だろうと仰っておられます。厄介だと思うのを分

かつた上で、そんな厄介な若者を、我が子よりも大切に思っ

て育ててくれ、そうしたらどれだけ道の上に大きい働きをするようになるか分からないと仰っ

て下さっています。そして、若者には、言葉一つが大切、どんな言葉を

かけるかで、お道が好きという心にもなるし、その逆もあり得ると読みとる

事ができます。教会や会活動における若者の育成は、人の子も我が子

のように思っ

て心と優しい言葉をかける事が大切

です。このおさしづは、育成の大切さを伝えるのによく引用されるおさしづ

ですが、今回は折角ですので、このおさしづをもう少しだけ掘り下げたいと思

います。実は、平野トラさんは、実の子供はありませんでした。その

トラさんに対して親神様は、教会に来る若者を自分の子ども以上に大切に

してくれと仰ったのです。トラさんは自分の子どもが授かる事を願っ

てやまなかつたと思います。我が子が授かれなれば、こんな事もしてやろう、

自分が母になればこんな言葉をかけてやろう、そんな心をかけてやろうと、色々と夢描

いたと思います。そんな思い描いた我が子よりも、教会にやってくる他人の

若者を大切に育ててくれと仰ったのです。

す。

▼会活動を進める上で大切なこと

どれだけ楽しく魅力的な行事や集まりを企画しても、そこに人が来てくれないと始まりません。私は先にもお話した通り、学生会で運命をたすけても

報を手に入れて学生会に参加したという人も、いるかもしれませんが、基本的には、誰かに声をかけてもらって、誰かに誘われて参加したという人がほとんどだと思います。この声を掛けるという行為がなければ、行事や会活動に、また教会にも足を運んでくれる人が増えるという事はないと思います。しかも、ただの声掛けではなく、心からこの行事に参加してもらいたい、あなたに来てほしいという、思いのこもった真実の声掛けが大切です。私もその真実の声掛け、お誘いのおかげで、ボロボロだった心をたすけてもらい、自ら求めて信仰する喜びを知る事が出来ました。今でも、仮免許試験不合格後のあの電話がなければ、自分の運命はどうなっていたらどうかと思いません。親の教えを届かせる大切なポイントの1つは、この「真実の声掛け」だと思います。そして、行事のお誘いの声掛けだけではなく、普段から若い子に声をかけて、電話をしたり、足を運んだり、共に時間を過ごし、心を尽くす。今期の本部学生担当委員会の活動方針に掲げている、「学生のために使う時間を増やそう」これに尽きると思

次に、会活動や教会に足を運んでくれた若者に、どのような心がけをすればよいのか。清水与之助先生に対するおさしづを紹介したいと思います。

大きい心を持って通れば大きい成る、小さい心を持って通れば小さいなる。親が怒って子供はどうして育つ。皆、をやの代りをするのや。満足させて連れて通るが親の役や。皆、満足させて、元のちばや親里やと言うて、満足して帰るのやで。(明21・7・7)

というおさしづです。親神様は、若い者を育てたかったら、親神様の代わりになって満足させてやってくれと仰っています。この楽しいと思ってもらう事が、若者の育成にはとても大切だと思います。なぜなら、この楽しいという感情から「また行きたい!!」という気持ちが生れます。そして、それと同時に、楽しませてくれた大人に対する信頼関係が生れます。また行きたいという気持ちからは、次の集まりへのつながりが生まれ、それを重ねていく事により、自主性が生まれ、その場所に自分の居場所が出来ます。自分の居場所が出来れば、次はそこに他の人を誘うようになり、若者

同士のつながりが自ずと広がっていきます。それをくり返す中で、若者と私たちの間にも信頼関係が深まっていき、距離が縮まります。距離が縮まるからこそ、先ほどの逸話篇にあるように、私たちが本当に伝えたいこの親の教えが届くという事になると思います。

▼自身の目指す育成

私の思う育成の理想は、「つとめとさづけ」を通して、医療や福祉、法律でも助けられない、家族からも見放されたような方々の心と運命が変わり、たすかる姿を目の当たりにしてもらおう事だと思っています。そんなおたすけをさせてもらいたくて、独身時代、まず貧に落ち切るために、寝袋を抱えて大阪にある西成という街に野宿での単独布教に行かせてもらいました。その布教中は、朝起きたら、通勤ラッシュの駅前に行き、路傍講演と十二下りのてをどりをつとめ、午前中は戸別訪問のにをいがけに歩きました。お昼時も駅前に行き、路傍講演と十二下りのてをどり。そして午後も暗くなるまで戸別訪問に歩き、夜の帰宅ラッシュの駅前、路傍講演と十二下りのてをどり

をつとめ、夜は公園や路面電車の駅のホームで寝袋を広げ、眠くなるまで教祖を求めておふでさきを読みました。そして1日の最後に座りづとめをつとめて、そのまま30人ぐらいのホームレスの方と駅のホームで川の字で休ませてもらおう。朝から晩まで、にをいがけ・おたすけ、そして、つとめとさづけしかない毎日。口から出る言葉は、みかぐらうたと教祖の話だけ。そんな毎日が本当に幸せでした。食べ物のお互えがなければ食べるものもない、基本的にいつもお腹がすいている。それでも、道の路銀と教えて頂くおさづけを頼りに、親神様・教祖を身近に感じながら生きる毎日が、本当に幸せで仕方なかったです。結婚が急に決まり、1年足らずで教会に帰ってきましたが、野宿していた時と、教祖を思う気持ちはずっと変わりません。今も日々をいがけ・おたすけに歩き、屋根のある所で寝れるだけでありがたい、寒い冬に寒さに凍える事なく休ませてもらえらる。ごはんの時間になれば食べるものがある。教祖の御苦労を思えば勿体ない、ありがたい、という気持ちで心がから込みあがってきます。こういう心になれる事が、このお道の信仰のありが

たい所だと思います。この様に自分なりに一生懸命に教祖を求めて通らせてもらっていたら、20年前、少ない時は、月次祭を当時会長の母と私の2人だけでつとめる事もありましたが、現在では、20人以上でつとめる事もあり、本当にありがたい姿を見せて頂いております。元々は全くこの教えを知らなかった方が、教会で元のをやである親神様の存在とその親心を知り、教祖のひながたという生き方のお手本がある事を知る。そして、つとめとさづけという具体的な運命を切り換える方法がある事を知って、お道の教えによってその人の心が変わり、言動や雰囲気、実際の環境がたすかっていく。その姿を少しでも多く見せてあげることが何よりの育成であると私は思っています。そのためには、育成する側の自分が、いつも教祖を身近に感じ、にをいがけ・おたすけにつとめて、自分に付いてきた若者が、教祖を見失わないようにしてあげたいと思います。そして、にをいがけ・おたすけの心で次代を担う若者に接し、次はその若者が同じように、お道の教えを人に伝える側になり、そしていつの日か、喜びや苦労、大好きな教祖について共に語り合うようにな



笠岡の学担委員との懇談会

るのが私の夢であり、理想です。育成の御用は、人を育てるのではなく、学生や若者を通して自らの心を育て、そして、共に育つ御用だと思います。若者だけでなく私たちも共に育つ事が出来るありがたい育成の御用を通して、この年祭の旬に共々に一歩でも二歩でも、三歩でも四歩でも教祖の心に近付かせて頂き、成人した姿を教祖にお喜び頂けたらと思います。

大教会だより

◎教人資格講習会修了者

立教187年3月12日終講

芦品 青木茂男
大江橋 村川陽子

※お詫びと訂正

本年2月21日発行の『かさおか第63巻第2号』5ページ「春季大祭講話」冒頭の記事名枠内に記載された世話人先生のお名前に誤植がありました。次の通り訂正し、お詫び申し上げます。

誤：板倉知治先生
正：板倉知幸先生



「えーっ、シルバーポイントが付いている」先日、スーパーのレシートを見て、声を上げた私。人のポイントが間違っていたかと思ってしまったのですが、今年、還暦を迎えた私は、自動的にポイントが付いていました(笑)

そばにいた娘に話すと、あつという間に家族のグループラインで報告：例のレシート添付で。

「お母さん、シルバーポイント見て、60歳実感!!」と。

すると、その中のひとりが、「シルバーポイントで倍なんて、得じゃん。歳とってよいことの一つですね」と。

私にとっては、シルバーの衝撃だったので、喜べるということ？

思い、受け取り方は、それぞれ違うものですね。

還暦を大きく意識するきっかけをもらいました。

12の干支が一巡し、第2の人生、60歳が長命めでたいとされた鎌倉時代からお祝いされる大切な節目。

華年という別名もあるようです。明るく元気に、笑顔あふれるシルバー人生をめざしたいものです。(む)



詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

- ・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、2日前までには、必ず詰所へご連絡ください。
- ・食事をしない(宿泊のみの)場合でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。

二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に会長 上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には 子ども可愛い一条の親心のまにまに 天然自然のお働きと自由の御守護をもつて結構に恙なくお連れ通り下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私どもは少しでもこのご恩にお応えするべく日々は朝夕に御礼申し上げつつたすけ一条の御用の上に努め励まして頂いております

その中にも今日のこの吉日は二月の月次祭を執り行う日柄でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 喜び心たすけ心も一人に明るく陽気に勇んで坐りつとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前には遠近を問わず今日の日を樂しみに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて今月は二年目の年祭活動をより活発に推し進めるべく部内教会への巡教を行いました 引き続き来月も巡教を行います また本日は祭典に引続き学生層育成者講習会を開催致します お聞かせ頂くお話をしっかりと胸に治め 学生層の若者の育成と丹精へと繋げて この二年目の成人の歩みを共に進める事ができるように努め励まして頂く所存でございます

何卒親神様には 親孝心一筋に成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に自由の御守護を賜り 一人ひとりの信仰が後に続く者に また世の人々に伝わって お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお願いの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十七年 二月月次祭 祭典役割表

祭主		扈者		講話		区分		役割	
大	長	今	川	山	野	学生層育成者講習会	坐り勤	田中隆之	田中隆之
川	昌彦	山	野	山	野		前半	三島渉	門脇元教
弘	実	山	野	岡	田	四月講話	後半	吉岡誠一郎	上原志郎
次	様	赤	木	上	原	上		岡崎真一	岡崎真一
上	原	岡	崎	上	原	浩		森本忠善	中村道徳
今	川	山	野	今	川			中村道徳	今川昌彦
田	中	山	野	山	野			谷内美知子	山野弘実
前	奥	山	野	山	野			中村初美	山野弘実
お	つ	山	野	山	野			室中悦子	山野弘実
と	め	山	野	山	野			浅野明教	山野弘実
を	ど	山	野	山	野			高木昭祥	山野弘実
り		山	野	山	野			田林久嗣	山野弘実
を		山	野	山	野			虫明立生	山野弘実
ど		山	野	山	野			山田敏教	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
ど		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
り		山	野	山	野			内海史郎	山野弘実
を		山	野	山					

立教187年 部内一斉巡教表

教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員
廣町	2月13日	上原志郎	香地華	2月9日	大教会長様	多古浦	2月13日	上原繁道
福廣	2月7日	上原繁道	真金	2月11日	上原繁次	瑞北	2月9日	横山逸郎
福勇	2月11日	田林久嗣	稻倉	2月13日	中島誠治	雲東	3月11日	大教会長様
福芦	2月9日	田林久嗣	稻瀬	2月5日	田中隆之	神村	2月10日	田林久嗣
福満	2月8日	上原繁道	稲富士	3月15日	上原志郎	大江橋	3月5日	佐藤真孝
福岩	2月12日	上原志郎	稲讃	2月10日	前会長様	品治	2月7日	今川昌彦
西村	3月10日	岡崎真一	門司港	3月12日	大教会長様	呉福	2月5日	大教会長様
福年	2月7日	中村道徳	大恵山	2月12日	吉岡誠一郎	鶴真	3月10日	今川昌彦
福昭	2月11日	今川昌彦	東水島	2月10日	今川昌彦	川島郷	2月10日	中島誠治
福春	3月5日	上原繁次	高児島	2月5日	上原繁道	作備	3月6日	吉岡誠一郎
福富士	3月10日	武内正美	高丸	3月6日	杉原善朗	錦ヶ原	3月3日	上原繁次
福東	2月9日	前会長様	出雲	2月11日	田中隆之	真府	2月9日	門脇元教
東福山	2月6日	山野弘実	瑞雲	3月6日	佐藤真孝	吉舎	2月4日	大教会長様
福南	2月13日	虫明立生	米府	2月15日	佐藤真孝	上小島	2月10日	大教会長様
福節	3月8日	大教会長様	弓ヶ濱	3月8日	森本忠善	木津和	3月6日	田中隆之
福輝	2月13日	門脇元教	西伯	3月9日	田林久嗣	國須	2月7日	佐藤真孝
坪生	3月5日	上原志郎	米美	3月5日	森本忠善	上吉野	2月12日	中村道徳
八尋	2月10日	吉岡誠一郎	伯仙	2月10日	横山逸郎	上備	2月8日	田中隆之
芦品	2月13日	吉岡誠一郎	照雲	3月6日	森本忠善	河佐	3月4日	虫明立生
安那	3月8日	杉原善朗	松都	3月7日	森本忠善	上川邊	3月12日	中村道徳
芦田川	3月3日	森本忠善	樺島	月3日	門脇元教	甲井	3月3日	虫明立生
三郡	2月10日	山野弘実	新輝豊	2月3日	杉原善朗	上父	3月7日	大教会長様
芦常	2月5日	今川昌彦	亀田山	2月12日	上原繁道	宇津戸	2月5日	杉原善朗
芦加茂	3月6日	上原志郎	出雲川津	3月10日	田林久嗣	府世原	2月12日	山野弘実
惠陽	2月14日	上原繁次	天場山	2月8日	横山逸郎	神驛	2月5日	岡崎真一
御野	3月8日	上原繁次	簸ノ川	2月10日	田中隆之	葦沼	2月7日	虫明立生

お道の仲間と共に学び合い
陽気ぐらしの実践へ

ようぼく 講習会

立教187年

受講対象

ようぼくで、講義・講話やグループタイム等の講習会受講が可能な方(年齢は問いません)

託児対象

生後91日目から小学校就学前まで(受講時の年齢)のお子様

定員

50名
(定員に達した場合、申込を締め切らせていただきます)

開催内容

3つの1日コースプログラムと、2つの1泊2日コースプログラムを開催します(右記参照)



「ようぼく講習会」とは？

ようぼくがそれぞれの立場で陽気ぐらし世界実現に向かってその使命を果たすことができるよう、親里ぢばにおいてをやの思召を学び、自分の役割を再確認し、今後の日常生活に活かす場です。

1日コース

3つのテーマ

親神様の御守護と教えの実践

1月14日、3月17日、6月16日

教祖

2月18日、4月21日、10月6日

おさづけは有難い

5月19日、8月18日、12月15日

会場：おやさとやかた東左第4棟・第5棟
時間：9時～16時15分頃
(受付8時30分/東左第4棟3階)
受講御供：2,000円

1泊2日コース

2つのテーマ

教えに基づく生き方
～ふしの受け止め方とたすかる信念～

7月6～7日、11月9～10日

教えに基づく生き方 ～はたらく～

9月15～16日

会場：第38母屋
宿泊場所：7月6～7日 第38母屋
9月15～16日 第38母屋
11月9～10日 各信者詰所
時間：9時30分～翌日15時30分頃
(受付9時/第38母屋)
受講御供：5,000円
(11月9～10日は4,000円)

ホームページまたは申込用紙で
お申し込みください

※申込用紙は教養室庶務掛に準備しています

主催：天理教教会本部 教養室

【お問合せ】教養室庶務掛

☎ 0743-63-2109

✉ yoboku-k@tenrikyo.or.jp

https://www.tenrikyo.or.jp/yoboku-kosyukai/

ようぼく講習会

🔍 検索



HPはこちらから